イエス・キリストを信じる

ヨハネ7章10~24節
2021年2月7日
松田 基子 師

イエス様は、マタイ福音書の11章6節で、
「**わたしにつまずかない人は幸いである。**」
と言われました。 人の子となられたイエス様に、人間は皆、躓(つまず)きました。 家畜小屋に生まれ、家柄もなく、地方の貧しい家庭に育ち、専門の高等教育を受けることもなく、人間的に見るなら、とても神の御子と考える事はできないイエス様でした。

だからと言って人々は何故、イエス様に躓いたのでしょうか。 それは人間が神様に逆らい、罪に支配され、 人間の誤った物差しで、イエス様を計ったからです。 しかも、
『自分達が最も神様に近い』
と自負し、思い込んでいた人々が、最もイエス様を断罪しました。 一見信仰に熱心な人ほど、信仰の本質を見失い、神様から遠い存在になりがちです。 そう言う人達は神様の名を称えながら、自分を神として自分の考えを神様の考えに掏(す)り替えるのです。 ここに人間の根本的な罪があります。

罪とは神様との関係を表すものです。 神様との関係を切って、**自分を神と**して生きる、つまり、**自己中心に生きる**ことです。 その行き着くところは**永遠の混沌、永遠の滅**びです。 **人類を**その運命から**救う**ために、**イエス様は人の世にお生まれに**なりました。イエス様の使命は、神様の、人間の創造主としての愛を、具体的に表して人々に、罪を悔い改めさせ、**神様の御心を教えること**でした。しかし、罪ある人間は、そのようなイエス様を理解することは出来ませんでした。

今朝の聖書箇所は、ヨハネ7章10節から24節までですが、そこにはイエス様につまずいた人々、自分の考えに固執し、神様の御心を受け入れようとしない人間の罪の姿が、示されています。

先ず、イエス様を理解出来なかったのは、一番イエス様に近い兄弟たちでした。 彼らはイエス様が十字架に架かられ、復活されて後、やっとイエス様が神の御子、救い主メシアであることに得心し、信じ従いましたが、 イエス様を兄弟としていた時は、世間の評判ばかりを気にして、イエス様に不満でした。

さて、イスラエルには、三大祭りが律法で定められていました。 申命記の16章 16 節には、
「**男子はすべて、年に三度、徐酵祭**(過越祭)、**7週祭**(五旬祭、ペンテコステ)、**仮庵祭に、 あなたの神、主の御前、主の選ばれる場所に出ねばならない**」
と命じられていました。 イエス様時代の主の御前、主に選ばれた場所とは、 エルサレム神殿の事です。 イスラエルは、四国ほどの広さです。エルサレム神殿までは、一番北のガリラヤからでも、五日路程で行く事が出来ます。

祭の時のエルサレム巡礼は、人々の楽しみでした。 7章10節からの表題には、その祭の一つ【仮庵祭でのイエス】とあります。 実は、ここでの問題は、5章の出来事に関係していますので、先に5章で起こった事を知っておく必要があります。 5章1節には、【ユダヤ人の祭】とだけ記されていて、何の祭かが明らかにされていません。ただ、7章の仮庵祭より前の祭でありました。
イエス様はその祭の時も、エルサレムに上って行かれました。

エルサレムにはベトザタと呼ばれる池があって、その池は間欠泉(かんけつせん)であったようです。定期的に水が動く様子に、人々は、
『天使たちが動かしている。』
と思っていました。 そのことから
『水が動く時に、真っ先に池に
入った人の病が癒される。』
との言い伝えがありました。 そのために病人達は池の周りの柱廊(ちゅうろう)に待機していたのでした。

イエス様は彼らの所に行かれますと、38年間

も、病気で苦しんでいる人を憐れんで、
「良くなりたいか」
とお尋ねになりました。 すると彼は、
「主よ、水が動く時、わたしを池の中に入れてくれる人がいないのです。 わたしが行くうちに、ほかの人が先に降りて行くのです。」
と訴えました。 イエス様はその人に、
「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」
と命じられました。 するとその人は、すぐに良くなって、床を担いで歩きだしたのです。 38年も病に苦しんで来た人が、イエス様によって癒されました。 それは本人も、周りの人々にとっても喜ばしい出来事です。

ところが、この事に悶着をつける人達がいました。 ヨハネ福音書がユダヤ人と呼ぶ人達です。エルサレムを中心とする宗教指導者を初め、律法主義の人々の事です。 彼らはその日が安息日であったことから、
「今日は安息日だ、だから床を担ぐことは、律法で許されていない。」
と言って疑義を唱えました。 彼らは癒し主が、イエス様だと分かると、イエス様を迫害し始めました。 イエス様はその彼らに対して、
5章17節で、
「わたしの父はいまもなお働いておられる。だから、わたしも働くのだ。」
とお答えになりました。 そのために 18 節には、
「このために、ユダヤ人たちは、ますますイエスを殺そうとねらうようになった。
イエスが安息日をやぶるだけでなく、神を御自身の父と呼んで、御自身を神と等しいものとされたからである。」
と記されています。

このような経緯から、7章1節には、
「その後、イエスはガリラヤを巡っておられた。ユダヤ人が殺そうとねらっていたので、ユダヤを巡ろうとは思われなかった。」
と記されています。 そのガリラヤで、イエス様は男性ばかりでも、五千人に及ぶ人々に、パンの奇跡を起こし、食事を与えられました。 イエス様の評判は、肉親の兄弟達の耳にも入りました。兄弟達は自分達まで噂の対称にされ、奇異の目で見られることから、イエス様に対して不満でした。

そのような中、仮庵祭が近づいて来た時、兄弟達はイエス様に対する不満から、
「ここを去ってユダヤに行き、あなたのしている業を弟子たちにも見せてやりなさい。 公に知られようとしながら、ひそかに行動するような人はいない。 こういうことをしているからには、自分を世にはっきり示しなさい。」
と皮肉たっぷりに、自分達のうっぷんをイエス様にぶっつけました。

兄弟たちこそ、イエス様を長兄として、イエス様の愛を受け、その正しさ、真実さ、神様への従順、忠実さを、弟子たち以上に誰よりも知って居る人達でした。 その彼らが、何故イエス様の側に立てなかったのでしょうか。 イエス様と共に、神様の前に跪くのではなくて、この世の人々の側に立って、この世の評価、人間の物差しで、イエス様を計ったからです。 世間の側に着いた兄弟達に対して、イエス様は7章7節で、
「世はあなたがたを憎むことはできないが、わたしを憎んでいる。 わたしが、世の行っている業は悪いと証ししているからだ。」
とお答えになっています。

イエス様は神様の、人々への愛を具現化するために、人の世に生まれ、愛を注がれましたが、また、神様の真の御心を教えて、世の行っている悪を正されました。 人間の罪の深さは、何処までも、自己正当化し、神様の御心を否定する事です。 イエス様はその罪に対して、命がけで神様の御心を語って行かれました。

イエス様は兄弟たちが仮庵祭に上って行った後、人目を避け、 隠れるようにして、エルサレムに上って行かれました。 それと言うのも、ユダヤ人達と無益な争いを避けるためでした。
群衆の間では、イエス様について、
「良い人だ。」
と言う人もいれば、

「**群衆を惑わしている。**」
と言う人も居て、思い思いに、噂し、囁きあっていました。 そして皆、それぞれの思いの中に、祭の興味の一つに、イエス様の出現を期待していました。

14節を見ますと、
「**祭も既に半ばになったころ、イエスは神殿の境内に上って行って、教え始められた。**」
とあります。 祭の半ば4日目と言うのは、人々の心が盛り上がってきて、頂点に達している所です。 神殿には一番多くの人々が集まって来る日です。境内で一番人々が多いのは外庭です。イエス様はそこで、堂々と教え始められました。国中から、また、国外から、祭にやって来た人々が、イエス様の教えに引き寄せられて行きました。そこには当然、律法の監視役の律法主義者達も集まって来ました。 その彼らにとっての驚きは、15節に、
「**この人は、学問をしたわけでもないのに、どうして聖書をこんなに良く知っているのだろう。**」
と言う疑問でした。

彼らの了解するところでは、律法の教師の許で、専門的に聖書を学んだ者でなければ、人々に教えることは出来ませんでした。 イエス様はその彼らに対して、16節で、
「**わたしの教えは、自分の教えではなく、わたしをお遣わしになった方の教えである。 この方の御心を行おうとする者は、わたしの教えが神からでたものか、わたしが勝手に話しているのか、分かるはずである。**」
とお答えになりました。

人の子となられたイエス様が、何故それ程深く聖書を知っておられるのか、それは、何時も常に、神様の御心を求め、御声を聴いておられたからです。 人の子として、人の世に生まれて来られたイエス様は、人間としての限界を何時も負っておられました。 それは、
『生まれ乍らに、聖書のことが全て分かっておられた』
と言う事ではなくて、**人間イエス様**は、**必死に祈り、神様の御心を求められた**と言う事です。
そこに神様は、御自身の御心を豊かに示されました。 人は誰も、心から神様に従いたいならば、イエス様に倣わなければ神様の御心は分かりません。

イエス様は、18節で、人間の心を鋭く突いておられます。
「**自分勝手に話す者は、自分の栄光を求める。 しかし、自分をお遣わしになった方の栄光を求める者は真実な人であり、その人には不義がない。**」
と言っておられます。

神様に心から従おうとしない、人間の本性は、自分を神とする自己中心性にあります。 人間は皆、自分が一番、自分が栄誉を受け、他人より一段でも上に立ちたいのです。 そこに、人間の罪深さがあります。 罪のないイエス様は、唯直すら、父なる神様の栄光のみを求め、その御心が成ることに、御自身の全てを差し出して行かれました。

そこでイエス様は、ユダヤ人を始め、集まった人々に、神様の御心を説き明かされました。
ところで律法主義に生きるユダヤ人達にとって、モーセの律法は、金科玉条(きんかぎょくじょう)でした。それは自分達の誇りでした。 その彼らに、イエス様は19節で、
「**モーセはあなたたちに律法を与えたではないか。 ところが、あなたたちはだれもその律法を守らない。 なぜ、わたしを殺そうとするのか。**」
と問われました。

彼らは、イエス様が、神様の御心を教えておられるにもかかわらず、それを否定して、
『自分達は律法を守って、神様に従っている』
と思い込んでいました。 しかし、彼らの実体はどうだったでしょうか。 律法は、
「**殺してはならない。**」
と命じているにも拘わらず、自己正当化するユダヤ人達は、イエス様を殺さないではいられま

せんでした。 そうしなければ、
『自分達の栄誉が得られない。』
と思ったのです。

一方群衆は、イエス様に、それ程の敵意は抱いていなかったでしょう。 ですから、
「あなたは悪霊に取りつかれている。 だれがあなたを殺そうというのか。」
と問い掛けました。 そこに居合わせたユダヤ人たちは、自分達の本心を隠して、
『そうだ・・・そうだ・・・』
と心の中でイエス様を嘲笑ったことでしょう。

イエス様は、そこで彼らに問い掛けられました。21節に、
「わたしが一つの業を行ったというので、あなたたちは皆驚いている。」
これは5章のベトザタの池の側に横たわっていた病人の癒しの事です。 ユダヤ人達にとっては、それが安息日であったことから、安息日違反に心が縛られてしまっていました。

そこでイエス様は、安息日特例を示されました。それは割礼です。 律法ではレビ記12章3節で、男児には、生まれて8日目に、割礼を施すことが命じられています。 それは当然、安息日に当たる場合が生じます。 一方、安息日規定では、活動は厳しく制限されています。 本来なら割礼を施す事も禁止されるべきですが、割礼だけは安息日であっても、施しても良いとの特例を作って辻褄を合わせたのです。

律法主義のユダヤ人も、民衆も皆、神様の御心よりも律法の字面に捕らわれて、神様に従っている積もりになっていました。 信仰に熱心な者の陥る落とし穴が、そこにあります。 イエス様はそこで、彼らの頑なな心に切り込んで行かれました。

23節に、
「モーセの律法をやぶらないようにと、人は安息日であっても、割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身を癒したからといって、腹を立てるのか。 うわべだけで裁くのをやめ、正しい裁きをしなさい。」
と言われました。

安息日は何のためにあるのでしょうか。 それは、神様の**御心**に、その**身を献げ、神様を誉め称える**為です。 割礼も**神の民に生かされる**ためでした。 そうであれば、病で苦しむ人が癒されて、神様を誉め称えることは、**神様の御心である**筈です。 神様の前に**造られた者**として、**遜**(へりくだ)**ること**なく、**自分の考えを正当化**していく人々にとって、イエス様を神の子、**真の救い主と、認める**事は出来ませでした。 彼らは、自己を正当化してゆくために、神の御子を十字架に架けるのです。

イエス・キリストを神の子、真の救い主と信じる事ができるかどうか、それはイエス様と共に神様の御心を求めて行くところにあります。 神様の前に造られた者として、遜り、
「イエス様の心を与えて下さい」
と祈り、従って行くとき、イエス様の救い主としての愛は、愈々明らかになっていきます。 そして、**イエス様なしには、生きられなく**なります。 それが**イエス・キリストを信じると言う事**です。 私たちも、そんな生き方を求めて、行こうではありませんか。

お祈りを致します。
憐れみ深い天の父なる神様
罪に縛られ、この世の価値観に生きる者に、
イエス・キリストを信じる事は出来ません。
造り主なる神様の前に、遜り、イエス様の心を与えて下さいと祈り、従う者として下さい。

この世に流され、イエス様に躓くことなく、
イエス様を信じ切る生涯を歩ませて下さい。

尊い救い主イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。
アーメン。